

埴輪製作という作業に主体的に関わっているか否かに起因するものといえる。多少想像を膨らませるならば、Ⅰ群の工人がハケ工具を占有していたことは、熟練した職人ほど自分の道具に愛着を持つという、現代の我々にも理解しやすい心理によるものであろう。

従来、円筒埴輪のスカシ孔の形状は時期差として捉えられ、方形スカシ孔は円形スカシ孔へと漸進的に変化するものと考えられてきた。しかし両形式が共存する土屋塚古墳において、円形スカシ孔がⅠ群、方形スカシ孔がⅡ群に対応し、両形式を製作する工人が存在しないことから、スカシ孔の形状は単なる時期差ではなくそれを製作した工人の系統差に起因するものであることが明らかとなった。

前稿でも筆者はスカシ孔の形状の違いを工人の系統差と捉え、古墳時代中期から後期にかけての埴輪生産組織の変遷を考えたことがあったが、同工品分析を行わなかったため推測の域を出ない部分が少なくなかった。本古墳の結果をすべての古墳に敷衍できるとは限らないが、他の古墳においてもスカシ孔の形状の違いを工人の系統差と捉えうる蓋然性は高まったといえよう。Ⅱ群の工人が古い形式である方形スカシ孔を用いていた理由は、彼らが埴輪生産において補助的な立場にあり、Ⅰ群の工人のみで埴輪生産に合わないといった状況下で初めて徴発されるような性格を帯びていたために、円形スカシ孔という新しい情報入手する機会が少なかったためと考えられる。

古墳時代後期になると関東全域で埴輪生産が爆発的に盛行するの

と同時に、方形スカシ孔の埴輪が消滅していく。また後期には継続的に埴輪を焼成した窯跡も多数発掘されている。このような状況には、埴輪生産が農業などの生業活動から独立し、ある程度の「专业化」が達成されていたと考えるのが自然である。本章で示したようにスカシ孔の形状が工人の系統に由来するのであれば、方形スカシ孔の消滅とは新しい技術と情報を持った工人層を中心とした埴輪生産組織の再編にはかならない。土屋塚古墳の埴輪生産体制はその前段階であり、土屋塚古墳でのⅠ群・Ⅱ群の関係は埴輪生産が「专业化」に向けて歩みだした段階と評価できる。

東国地域の家形石棺をめぐる

山本ジェームズ

家形石棺とは、古墳時代後期を中心に古墳などの埋葬主体部に納められた石棺の一種である。「家形」の名称は、棺蓋が屋根状を呈することに由来するものである。家形石棺は全国的に分布する石棺であり、特に九州、山陰・山陽、そして畿内で盛行した棺種である。九州、山陰・山陽、そして畿内を中心とする各地域では、他地域間や他型式の石棺などと相互に影響を及ぼし合いながらも、それぞれ独自の家形石棺を発展させ、言うなれば「石棺文化圏」とも呼べるものが形成されていたことが明らかとなってきた。

畿内においては古墳時代中期の後半頃に家形石棺が出現するが、

石棺に使用されている石材や棺の形態上の類似点から、畿内の家形石棺の源流が九州の阿蘇凝灰岩製の石棺にあるという研究は今日よく知られるところである。畿内に持ち込まれた古式の家形石棺を、むしろ舟形石棺に近いとする見方も多い。しかし、その後畿内地域では、舟形石棺の丸みを帯びる特徴を払拭するように、次第に角張る石棺を造るようになる。石材もそれまでの阿蘇凝灰岩ではなく、新たに二上山凝灰岩を採用し、また、古墳時代中期の長持形石棺に使用していた兵庫県産の竜山石（凝灰岩）を多用するようになっていく。このように、大和・河内を中心とした畿内地域で多く見られる典型的な石棺の形態ができあがり、後期古墳に埋葬される石棺形態の一体系として畿内の家形石棺が完成したと言えるだろう。

大和・河内地域を筆頭に西日本ではかなりの数が見られる家形石棺だが、翻って東日本では、むしろ希有なものとなっている。東日本では家形石棺が分布する地域とそうでない地域があるなど地域的偏在性が顕著であり、地域によっては完全な空白域も存在している。このような考古学的現状の中で、東日本諸地域で見られる家形石棺には、各地域の在地的特徴を持ちながらも、畿内の家形石棺と極めて近似した特徴を持つものが見られる。主な類似点は、棺蓋に造り出される縄掛突起の配置や箱状を呈する棺身である。以下で概観しよう。

念南寺古墳棺は棺蓋に造り出す縄掛突起の配置および棺身の形態的特徴が野神古墳棺と近似し、ほぼ同時期の形態として位置付けら

れる。小山市所在棺は棺蓋が破損しているため全容は明らかではないが、長側辺二対、短側辺一对という縄掛突起の配置やほぼ水平に突出する突起の角度など牧野古墳棺および金山古墳棺と類似している。小泉口八幡山古墳棺は、縄掛突起が長側辺の片方にのみ造り出されるが、縄掛突起の配置など平面的特徴は藤ノ木古墳棺と近似している。縄掛突起の突出角度がやや下向きであることを勘案すると、藤ノ木古墳棺に後出する時期が考えられる。愛宕山古墳棺は今泉口八幡山古墳棺と形態的に共通する要素を持ったため、今泉口八幡山古墳に後続する可能性を指摘することができる。宝塔山古墳棺は格狭間状に彫られた底部と棺身の一面にある八角形の彫り込みが特徴的な石棺である。縄掛突起は棺蓋幅を超えて造り出されないが、縄掛突起の数・配置、突出角度、頂部平坦面の広がりなど艸墓古墳棺と近似する。ほぼ同時期の形態と推定されるものである。賤機山古墳棺および駿河丸山古墳棺は長側辺三対、短側辺一对という刳抜式には特異な縄掛突起の配置を持つ。畿内では同じ縄掛突起の配置を持つウル神古墳棺との強い類似性が見出せる。

以上のように、関東を中心とした東日本の石棺が畿内の家形石棺と類似する特徴を持つことを示した。また、東日本諸地域の家形石棺が、畿内家形石棺の特定の形態にのみ類似することではないことも併せて指摘したい。すなわち、東日本に分布する家形石棺の中で畿内家形石棺の系統の中で捉えられるものがあり、これらの石棺が畿内の家形石棺を意図して製作されたものと考えられる。そして、

東日本諸地域の家形石棺が特定の形態に定まらないことから、畿内の家形石棺が特定の時期に齊一的に各地に拡散した状況にはないということが理解される。家形石棺が畿内では特定の被葬者層にのみ限られた石棺であることを鑑みるとその特殊性が浮き彫りになるが、東日本の諸地域においても随意に製作されたというような状況になく、家形石棺の製作はごく限られた地域で一部の被葬者にのみ許された特権であったことが想定されるのである。

西日本と比較して家形石棺の分布が少ない東日本の諸地域において、畿内の家形石棺と近似した家形石棺を納めている地域は、畿内の中央政権と密接な関係にある特定被葬者が拠点とした地域であったものと想定されるのである。家形石棺の動向から古墳時代後期の社会背景を読み解くと共に、考古学と古代史を絡めて該期の社会情勢を考えていく必要があるであろう。

前期青銅器時代Ⅰ・Ⅱ期におけるエジプト—パレスティナ関係の変遷

—石製品の検討を中心に—

山藤 正敏

本発表は、パレスティナ地域から出土するエジプト系石製品の分析から、前期青銅器時代Ⅰ期からⅡ期初頭にかけてのパレスティナ地域におけるエジプトとの関係の変遷について再検討を加えること

平成一七年度早稲田大学史学会大会報告

とを目的としている。

前四千年紀後半から前三千年紀初期 (ca. 3650 B.C. ~ 2900 B.C.)、すなわち前期青銅器時代 (以下 EB = Early Bronze) I a 期・I b 期からⅡ期初の間、パレスティナ地域南部を中心として、エジプトからの影響を示すと考えられる遺物が顕著に出現し始め、その出土事例は、EB I b 期に急激に増加した後、EB Ⅱ期において急激に減少する。これらの現象から、両地域間の関係に関して、EB Ⅰ期におけるエジプトによるパレスティナ地域への軍事的侵略・征服説 (Yadin 1955; Yeivin 1960, 1968)、交易説 (Ward 1963, 1969; Amiran 1974)、交易を目的としたエジプトからの植民・移住説 (Gophna 1976; Ben-Tor 1986) などが唱えられ、近年では交易を目的とした人間集団の移動を想定した上で、銅石器時代Ⅰ・EB Ⅱ期までの両地域関係を核—周縁モデルにより通時的に捉えなおす新たな試みが行われている (Miroschedji 2002; Levy and van den Brink 2002)。

以上の研究において最も頻繁に引用された遺物は、他の遺物をはるかに上回る量が出土するエジプト系土器であり、このため従来の研究は土器の分析へ偏向しがちであったといえる。しかし、当該期のエジプトとパレスティナ地域の関係の変遷をより適切に検討・再構成するためには、土器やセレク・円筒印章・印影以外のパレスティナ地域出土のエジプト系遺物をも含めた、詳細かつ総合的な研究が必要不可欠であると考えられる。